

書評

藤本卓司 著

感染症レジデントマニュアル

洛和会音羽病院長

松 村 理 司

2 年も前に書評を依頼されていたが、なかなか完読できなかったわけは、私の怠慢について、個人的な環境の変化にあった。わりあい大手の病院の院長職への突然の就任は、想定外の激務の日々であった。大所帯の医局人事は、継続させること自体が困難な科も含まれる。民間病院なので、経営問題にも大きくのしかかられる。30 年間に及ぶ公務員生活を振り返ると、「親方日の丸」の甘さを禁じ得ない。大小の医療事故への対応に昼夜をおかないこともあった。

その医療事故だが、最近では、感染症関連のものが多くなっている。当院でも、VRE(バンコマイシン耐性腸球菌)保菌の集団発生や透析室での急性 B 型肝炎の多発に襲われたのは、不面目の極みである。本書の著者の藤本卓司先生は、総合内科医や感染症医とし

て現場の研修医や若手医師を惹きつけているだけでなく、院内感染管理医師としても名高い。

そういった背景が、本書にいくつもの美しい特徴を与えている。第 1 に、抗菌薬の選択にことのほかうるさい。抗菌域が狭く、副作用が少なく、安い薬を使えとしつこい。第 2 に、実地臨床の場での大きなツールとしてのグラム染色へのこだわりが中途半端ではない。写真やシェーマが多用され、これでもかといわんばかりであり、先生の執念を感じさせられる。第 3 に、抗菌薬感受性率について、勤務先の市立堺病院の具体例が取り上げられていることである。「グラム染色に基づく狭域抗菌薬の使用」という良質の原理主義の成果が一望できる。第 4 に、多数のメモがはさまれており、感染症関連以外のものも多く、いか

にも臨床的な薫風が読書のオアシスになっている。第 5 として、実に読みやすい。箇条書きであるからだけでなく、文章が短く、歯切れがよいからでもある。硬質で、科学的な文体といえる。

新医師臨床研修制度が開始されて 3 年目に入る。市立堺病院の人氣は抜群だが、本書を著された藤本先生の力量にも大きく支えられているのは疑いようがない。地域病院に初期研修医がとられたと嘆く大学人は、先生のこのような実績をまず見習うべきだろう。

なお、9 ページの最下段に私と Willis 先生への言及がある。1988 年とある。懐かしかった。藤本先生が市立舞鶴市民病院へ Willis 先生の教えを受けるためにはるばるやってきたのは、弱冠卒後 4〜5 年次であり、沖縄県立中部病院における感染症研修への旅の途次だったのがわかる。若き日のあちこちでの武者修行や他流試合が、先生を今日の姿に鍛えあげたように見受けられる。

〔B 6 変型 頁 412 2004 年
定価 3,990 円(本体 3,800 円+
税 5%) 医学書院刊〕